

『山月記』が山月「記」とされた必然性に関する一考察

林 純次・岸和弘・赤田愛結・今井和
宇高颯志朗・川崎瀬夏・篠原遼太
田井中一輝・高田まり菜・村地紳・山岡俊介

序章

中島敦『山月記』は、『文学界』一九四二年二月号において掲載された『古譚』のうちの一篇である。作品発表当時、中島敦はパラオに滞在しており、帰国後、同年七月に刊行した作品集『光と風と夢』に、既出の本文を一部改変する形で『山月記』をも収めた。

『山月記』については数多の先行研究があり、これまでに様々な問題点が指摘されてきた。それらのうち、唐・李景亮『人虎伝』をめぐる問題がその一例として挙げられよう。『山月記』は『人虎伝』をもとに創作された。濱川（1971）は、中島敦がそのタイトルを『人虎伝』から『山月記』に改変するという出来事が、『山月記』を含む『古譚』の創作の過程で起こったことを次のように示唆する。

中島敦は、「山月記」と同じ『古譚』の中的一篇「文字禍」の習作ノートらしいものを遺しているが、そのノート

の初めの部分に『古譚』四篇の題名が記されている。そこでは、「山月記」という題名は、まだ使われておらず、「人虎伝」と書かれている。この「人虎伝」が、彼自身の作品名をあらわすのか、それとも素材としての李景亮の「人虎伝」をあらわすのか速断は出来ないが、他の三つ、——「つきもの」、「木乃伊」、「文字禍」——から考えて、作品名をさすものと考えてよからう（二）。

そもそも、中島敦には著作『名人伝』があるため、「伝」という字をタイトルとして用いることを峻拒した作家ではない。現に『山月記』においても、濱川（1971）の指摘する通り、当初は『人虎伝』という仮題がつけられていたという痕跡が残されている。しかし、創作の過程で、敢えてタイトルを、原話通りの「伝」から「記」へと改変し、『山月記』というタイトルにしたことには、何らかの意図があったのではないか。本稿においては、この「伝」から「記」への改変の問題を嚆矢に、中島敦が著作のタイトルの末尾に「記」を付した作品にはどのような

うな性格が見られるか考察し、中島敦が著作のタイトルの末尾に付した「記」ということばに込められた意図が何であったのか、その一端について考察する。

本章

第一節 先行研究の検討

神奈川近代文学館・中島敦文庫所蔵の中島敦の署名入りの辞書である『辞林』は、中島敦本人が使用していた可能性の高い辞書であると言える。試みに「伝」及び「記」についての記述を確認すると、「伝」については、「つたふること・さづくること・(中略)・賢人の著書・記録・史乗・個人の生涯の事蹟を記したるもの⁽¹⁾」(傍点筆者)、「記」については、「しるし・標識・事實をしるしたる文書・きろく・漢文の一體・事實をしるすことを主とするもの⁽²⁾」(傍点筆者)と記されていた。この説明は、中島敦本人が触れ得た情報として、そしてこれから述べる先行研究を検討するにあたっての前提情報として確認しておきたい。

中島敦における「伝」と「記」の差異について言及した先行研究として、管見の限りにおいて、秋元(1989)、勝又(2004)、堀(2010)が挙げられる。

秋元(1989)は「構想時点での『人虎伝』が『山月記』という作品として定着したことは、単に標題のみの問題ではなく、作品世界の本質に関わる問題を含んでいたと思える。なぜならそれは「伝」から「記」への質的転換であって、「伝」には虎となつた男の生涯を語り伝える意識が色濃いのに対して、「記」

は虎となつた男の、事の顛末を作者の責任において書き記すものだからである⁽³⁾」(傍点筆者)と述べている。「伝」について、「虎となつた男の生涯を語り伝える意識が色濃い」と述べ、「記」について、「虎となつた男の、事の顛末を作者の責任において書き記すもの」と述べている点、先掲の『辞林』の記述と類似する、言わば辞書的な説明であると言える。

勝又(2004)は「中島敦は原典である『唐晋小説集』『人虎伝』の即物的に過ぎるタイトルを嫌つたのであろうが、そして読者もまた、「時に、残月、光冷ややかに……」と始まる一編結末のイメージなどと重ねて、それで好しとしてきたと思うが、「記」とは、漢文の用法では元来ものの由来を示す字なのだ。従つて「山月記」とは山と月の由来、という意味になつてしまつて、李徴の悲劇とはずれてしまう。だからこの「記」は、藤原定家『明月記』などと言つたときの「記」と同じ、日本的な用法なのである⁽⁴⁾」と述べる。「記」について、「漢文の用法では元来ものの由来を示す字なのだ」と述べる点、何に依つていのか不明であるが、『山月記』の「記」を「日本的な用法」と述べている点、これも先掲『辞林』をはじめとする、一般的な辞書の説明の範疇を出ないものだと言えよう。

堀(2010)は、「(一)に「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」「猛獣使」「猛獣」「性情」「虎」といった語をキーワードとして展開する自己分析は、明の徐師曾が『文体明辨』にいう言説を借りれば、「叙事」、すなわち一官吏の虎への変身という奇事を叙述することを主体とする「記」の言語空間の中にあつて、そこに雑えられた「議論」に他ならぬもので、それこそ本作品における「記」たる所以の言説に当たるものではなからうか。そこに

いわゆる「記」を新たに名乗る積極的な意味を見出すことが可能となる。まさに依拠する「人虎伝」がもつところの、「一人の始終」を記す「伝」の大枠を脱却して、新たに「記」を掲げる所以でもある^⑧（傍点筆者）と述べている。ここでは、明・徐師曾『文体明弁』に基づき、「伝」を、「一人の始終」を記すもの、「記」を、「叙事」「議論」と説明する。『文体明弁』とは、同じく堀（2010）によれば、一六六六年に和刻本が刊行された書物であり、田鍋幸信（1978）「中島敦蔵書目録」においては関連書が存在が確認できないと断りつつも、「中島の時代に近接して抄本の類も流通して『文体明弁』の所説はかなり受容された^⑨」と述べられている。堀（2010）説は、基づいている書物が従前の説とは異なるが、「記」を「議論」と説明する点を除いては、先掲『辞林』の説明と変わらず、ここでも概ね辞書の記述を前提とした説明がなされていると言えるであろう。

以上見てきたように、中島敦『山月記』の「記」に込められた意味については、辞書的な説明を前提として踏まえた上で説明されることが多かった。しかし、このような説明は、中島敦が「記」に込めた意図を考察するにあたって十分であるとは言えない。なぜなら、中島敦の創作活動が、辞書に記されているような一般的な説明のみを前提として行われているとは言いが切れないからだ。

そこで、次節以降、中島敦の「記」作品として、タイトルの末尾を「記」で結んでいる作品である『山月記』『わが西遊記』^⑩『かめれおん日記』『狼疾記』を挙げ、本文に認められる特徴の分析を踏まえて、中島敦がタイトルの末尾に付した「記」に

どのような意図を込めているかということについて考察していきたい。なお、単純にタイトルに「記」を含む作品としては、上記の他に、『環礁——ミクロネシア巡島記抄——』がある。これは『寂しい島』『夾竹桃の家の女』『ナポレオン』『真昼』『マリヤン』『風物抄』の六作品の総称である。これらの作品群については、「記」が副題に含まれること、そして「記」で結んでおらず「記抄」の形になっていることから、拙稿の示す「記」作品とは同列に扱わず、「記」作品に含めない。

第二節 「記」作品に見られる特徴

先述の「記」作品において、共通して指摘できる特徴の一つとして、一人称「俺」^⑪が作中で用いられている点が挙げられる。作中で、誰が、どのように用いているかという点を描いて、中島敦の『断片』を除く全散文作品（以下、「中島敦の散文作品」と呼ぶ）における「俺」の例数と、その出現頻度をまとめると、【表1】のようになる。表に示す通り、「俺」という一人称は全部で二三〇例存在するが、これは「私」「自分」など、多い場合に一作品中で一〇〇例前後の用例を認めることの出来る他の一人称の例数に比して、明らかに少ないと言える。なお、【表1】でいう「出現頻度」は、各作品の長短に違いがあることを考慮し、例数を割合化して表示するために、筆者が便宜上用いるものであり、各作品における「俺」の例数を、ちくま文庫（1993）『中島敦全集』全三巻における、作品ごとの所要頁数で除して算出した。【表1】を一見して明らかのように、先述の「記」作品における「俺」の出現頻度は、習作『あ

る生活』を除いて、他作品に比して顕著に高い。後に詳述するが、「記」作品のそれぞれにおいて、主人公が一人称として用いる「俺」に限定して出現頻度を算出しても、『巡査の居る風景』における出現頻度0.368を下回ることはない。この「俺」の出現頻度の高さは、中島敦の「記」作品の表見的特徴の一端を表しているといえよう。

第三節 「俺」の用法

一 梗概

ここで問題となるのは、「俺」という一人称が、他の一人称に比してどのような場合に用いられる傾向があるか、ということである。

中島敦は散文作品において「俺」をどのように用いたか。ここでは、まず「俺」の使い手が、誰に対して言葉を発しているのか、という点に注目したい。

用例を検討すると、「俺」が用いられる場面では、「俺」の使い手が、他者に対してではなく、心内語として、あるいは独白や自問として言葉を発する際の一人称として用いている例が多く認められる。

働きながら、ふと考えた。俺は幸福か？ と。(十)

(中島敦『光と風と夢』)

俺は、もと、此の木乃伊だったんだよ。たしかに。(十一)

(中島敦『木乃伊』)

前者は主人公スティヴンソンの日記の中の一節であり、自問を伴う心内語である。後者も、「俺」の使い手であるパリスカスが、当該場面において、「たった一人で、或る非常に古そうな地下の墓室の中に立っていた。(十二)」と述べられている。そのため、この「俺」を含む一節は、自己の認識を独白として吐露した言葉であることが分かる。

ある言葉が、自己に向けて発せられた言葉か、他者に向けて発せられた言葉か、という点については、言葉が発せられた状況によつては必ずしも截然と分けられるものではない。たとえば、後述するように、『山月記』における、李徴自身による自らの経歴や思想についての語りは、自らを語りの対象としている一方で、袁孝という聴き手に対して語られたものとも言える。しかし、このように言葉が誰に対して発せられたものであるか、截然と分けて判断できないこともあるという点について考慮しつつ、「誰に対して発しているかに関わらず」自己の存在や生き方に対する逡巡・疑問や言及」を「自問自答」と定義すると、先に挙げた二例も含め、「俺」という一人称は、後に示すように、自問自答場面で用いられる例が多く認められる。もちろん、中島敦の散文作品を対象に調査すると、次のように、「俺」以外の一人称で以て「自問自答」をする例もある。

ひょいと、何の関係もない・妙な疑念が湧いた。自分は今迄何か良き仕事を此の地上に残したか？ と。(十三)

(中島敦『光と風と夢』)

しかし、このように、「俺」以外の一人称を用いて、かつ、自分自身を対象とした疑問文であると形式上から判断できる自問自答の例は、「記」作品をはじめとする散文作品において調べても、極めて少数しか存在しない。中でもその例外的な例が多かった『光と風と夢』においては、「自分」の用例は一七例認められ、「私」は三〇一例認められるが、そのうちそれらを対象とした自問自答の疑問文であると形式上から判断できる例は、ともに一割にも満たない。一方、『光と風と夢』で、「俺」について同じ基準を用いて調査すると、四九例中、一三例が形式上、「俺」を対象とした疑問文となっている。このことは、「俺」という一人称が「自問自答」の文脈で用いられる傾向があることの一つの証左となる。

「俺」の用法の特徴として、もう一点指摘できるのは、「日記」や「手記」の体裁を取っている作品において例が多く見られる傾向にあることだ。【表一】に示す通り、『光と風と夢』『かめれおん日記』『沙門悟浄の手記』という副題を冠する『悟浄歎異』が全作品中で「俺」の使用頻度が高い作品群に含まれているのがその証左である。

このように、中島敦の散文作品において一人称「俺」は、自問自答場面で用いられる傾向があり、日記や手記の体裁を取っている作品において用いられる傾向があると言える。

このことを踏まえて、以下、「記」作品のそれぞれにおける「俺」の用法について触れていきたい。

二 『山月記』の場合

『山月記』においては「己^{おのれ}」と「己^{おれ}」とが使い分けられている。読みはルビによって判断可能なものもあるが、ルビの振られていない「己」も三四例存在する。【表一】作成にあたっては、ルビが振られていて「己^{おれ}」と読める確例だけを数えた。そのため、『山月記』には、少なくとも七例以上、「俺」と同義の一人称が使われていると言える。また、『文学界』一九四二年二月号所収「古譚」における「山月記」、及び一九四二年七月に筑摩書房より出版された中島敦『光と風と夢』所収の「山月記」本文では、それぞれ「人間であつた時、己は努めて人との交を避けた^(十四)」の「己^{おれ}」にルビが無く、「己は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた^(十五)」の「己」にはルビがある点には注意を要する。

『山月記』では、行方をくらませていた主人公李徴が、虎の姿となつて衰憊と邂逅する。そののち、現在に至るまでの李徴についての李徴自身の語りが展開され、その部分が作品の多くを占めている。その李徴の語りの中では、疑問文の形を取らず、断定調の表現がほとんどであるものの、李徴自身が自らの存在や生き方について言及する「自問自答」が多く繰り返されている。例えば、次のような発言が挙げられる。

今迄は、どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、此の間ひよいと気が付いて見たら、己^{おれ}はどうして以前、人間だつたのかと考えていた^(十六)。

(中島敦『山月記』)

さて、序章で述べたように、『山月記』に関しては、なぜ中島敦が、タイトルを原話の『人虎伝』から変更したのかという点が一つの大きな問題となっている。中島敦がタイトルに「伝」をつけた作品は『名人伝』の一作のみであるが、『名人伝』では、主人公紀昌の技芸の習得に関わる話が繰り返され、一人称「俺」が使われることもなければ、紀昌が自分自身の存在や生き方について分析し、自問自答するような描写も見られない。これらの点において先述のような例を含む『山月記』とは性格を大きく異にしていると言える。一方、先に見たように『山月記』では、袁修に往年の「自嘲癖」を思い起こさせる主人公公李徴が、一人称「俺」を使い、自問自答を繰り返している。作品のこうした性格は、後に見るように、他の「記」作品と親和性の高いものであると言える。『人虎伝』は、中島敦によって「記」の性格を有する作品へと確かに改められていたのだ。

三 『わが西遊記』の場合

『わが西遊記』は、『悟浄出世』と『悟浄歎異』の二作の総称である。「俺」の例数と出現頻度は、二作に分けて算出したが、二作とも『かめれおん日記』よりも高い出現頻度を示した。まず、『悟浄出世』について見てみたい。

『悟浄出世』においては、主人公悟浄が、医者いしやの魚怪が作中で「元来、我々（筆者註：妖怪）の中には無かった病氣じやが、我々が人間を咋うようになってから、我々の間にも極く稀に、之に侵される者が出来た（七）」と説明する病氣に侵され、次に示すように、『自分』というものに疑をもつ（八）」ようにな

っている。

彼等（筆者註：流沙河の底に栖んでいた妖怪たち）は渠（筆者註：悟浄のこと）に縛名（九）して、独言悟浄と呼んだ。渠が常に、自己に不安を感じ、身を切刻む後悔に苛まれ、心の中で反芻される其の哀しい自己苛責が、つい独り言となつて洩れるが故である。遠方から見ると小さな泡が渠の口から出ているに過ぎないような時でも、実は彼が微かな声で呟（十）ているのである。「俺は莫迦だ」とか、「どうして俺は斯うなんだろう」とか、「もう駄目だ。俺は」とか、時として「俺は墮天使だ」とか（十一）。

（中島敦『悟浄出世』）

ここでもやはり、「俺」は、「独言」として、「俺は莫迦だ」「もう駄目だ。俺は」といった自己苛責や、「どうして俺は斯うなんだろう」といった自問に伴って用いられていると言える。

『悟浄出世』における「俺」の例数は三〇である。ただし、この中には主人公悟浄以外の人物が用いる「俺」「わし」が一七例含まれる。それらを除くと「俺」の例数は一三になり、出現頻度は0.33となる。依然として『巡査の居る風景』よりも出現頻度は高い。

続いて、『悟浄歎異』を見る。

『悟浄歎異』は、『悟浄出世』を承けて続く作品で、玄奘法師と巡り会い、人間に成りかわった悟浄が、玄奘・孫悟空・猪八戒の三者とともに遍歴する中で、自己を相対的にとらえる視点を獲得していく。この作品は、副題の示す通り、主人公悟浄

が手記として自らの想いを陳述した作品であるという設定にな
っている。その事情も相俟って、「俺」の出現頻度は他の散文
作品よりも群を抜いて高い。作中、「俺」の例数は四三で、そ
のうち主人公悟浄が用いる「俺」は三六例、出現頻度は1.71
である。

俺みたいな者は、何時何処の世に生れても、結局は、調節
者、忠告者、観測者にとどまるのだろうか。決して行動者
には成れないのだろうか^(二七)？

(中島敦『悟浄歎異』)

この記述は、三蔵、孫悟空、猪八戒の三者との旅のさなかで、
悟浄が自らの存在・生き方について自問した内容である。

このように、『悟浄出世』『悟浄歎異』の双方において、『山
月記』と同様、「俺」は主人公の自問に伴って用いられている
例があることが分かる。

四 『かめれおん日記』の場合

『かめれおん日記』における「俺」の用例は全一四例、出現
頻度は0.4で、「記」作品中で最も低い。作中に出現する「俺」
は、全て主人公である先生が一人称として用いたものである。

一月^{ひとつき}程前、自分の体内の諸器関の一つ一つに就いて、(身
体模型図や動物解剖の時のことなどを思い浮かべながら)
その所在のあたりを押して見では、其の大きさ、形、色、

湿り工合、柔かさ、などを、目をつぶって想像して見た。

(中略)すると、私という人間の肉体を組立てている各部
分に注意が行き亘るにつれ、次第に、私という人間の所在
が判らなくなってきた。俺は一体何処にある？ 之は何も、
私が大脳の生理に詳しくないから、又、自意識に就いての
考察を知らないから、こんな幼稚な疑問が出て来た訳では
なからう。もっと遙かに肉体的な(全身的な)疑惑なのだ
(二八)。

(中島敦『かめれおん日記』)

この「俺は一体何処にある？」という問いは、先生が自らの
存在について思索する中で生じた自問である。また、次のよう
な記述も見られる。

考えて見れば、元々世界に対して甘い考え方をしていた人
間でなければ、厭世観を抱くわけもないし、自惚やか、自
己を甘やかしている人間でなければ、そう何時も「自己へ
の省察」「自己苛責」を繰返す訳がない。だから、俺みた
いに常にこの悪癖に耽るものは、大甘々の自惚やの見本な
のだろう。實際それに違いない。全く、私、私、と、どれ
だけ私が、えらいんだ。そんなに、しよつちゅう私のこと
を考えてるなんて^(二九)。

(中島敦『かめれおん日記』)

この場面も、先生が他者に自らについて語るものではない。
あくまで自己省察の表れである。そして、ここでも先の二作品

と同じように、「俺みたいに常にこの悪癖に耽るものは、大甘々の自惚やの見本のだらう」と、主人公による自己の輕蔑が認められる。

五 『狼疾記』の場合

『狼疾記』は、本文及び註において、「俺」と「己^{おれ}」とが使用されている。例数は全三一例だが、そのうち九例は、本文中に言及されるカフカ『審』の主人公「俺」を指す例である。その例を除いて、主人公三造に関わる例に限って見ると、例数は全二二例、その出現頻度は0.79であり、『山月記』と『かれおん日記』との間に位置する数値となる。

『狼疾記』においても、「俺」という一人称は、自らの存在や生き方についての自問自答場面において用いられる。例えば、次のような例である。

曲りくねった論理を辿って見て、はて、俺の存在は幸福なのだぞ、と、自分を説得して見ねばならぬ幸福などでは仕方なかったのだ（傍点筆者）⁽¹¹⁰⁾。

（中島敦『狼疾記』）

ここに記される通り、「自分を説得」する言葉として「俺の存在は幸福なのだぞ」という言葉が存在している。本文では、引用箇所が続く場面で、「三造の中にある貧弱な常識家⁽¹¹⁰⁾」に対する「彼（筆者註…三造）」の中にいる、もう一人⁽¹¹¹⁾」からの反問という形で自問自答が記されるが、その中でも繰り返す

返し「俺」が用いられている。また、三造の同僚である国漢の老教師が作詩した漢詩に、三造が咄嗟に同じ韻を用いて報いた詩が老教師に褒められる、という場面においては、三造は次のように自らの内心を述懐している。

全く、その時、自分は——尊大なるべき俺の自尊心は——何と卑小な喜びにくすぐられたことだろう！（中略）そういえば、俺はここ何年何箇月の間、自分に向って発せられた一つの讃辞をも聞かなかった。自分の飢えていたのは、こんな詰まらないものに対してだったのか⁽¹¹²⁾。

（中島敦『狼疾記』）

この場面においても、引用部分末尾の一文から、主人公三造の述懐は三造自身に対してなされていると理解することができ。この場面における、「自分は——尊大なるべき俺の自尊心は——何と卑小な喜びにくすぐられたことだろう！」という表現や、「自分の飢えていたのは、こんな詰まらないものに対してだったのか」という表現からは、作中、自らを「きたならしい助平野郎⁽¹¹³⁾」とまで評する主人公三造の自嘲を読み取れる。

六 「俺」の用法から見た「記」作品の特徴

以上のように、全ての「記」作品において、「俺」という一人称は、主人公の自問自答場面に伴って用いられる例が認められる。この点が「記」作品の特徴の一端として指摘できる。こ

のことを、「記」作品の全てが「手記」「日記」の体裁を取っているわけではないこと、そして、「記」作品において一人称「俺」の出現頻度が他作品よりも相対的に高いことと考え合わせると、先述のような「俺」の用法の特徴を見る限り、中島敦の「記」作品は、主人公自身による内面の記述としての性格が、他作品と比して相対的に強いと言えよう。その意味では、中島敦の「記」作品は、叙情的な性格を含んでいるとさえ言うことが出来る。先に見た先行研究が示すように、辞書的な「記」の説明に基づく叙事的な性質を言うだけでは、その特徴をとらえきることが出来ないと考えられる。

第四節 『山月記』評価史との関わり

本節では、ここまでの論に関連する派生的な問題として、研究史・評価史上で述べられてきた、『山月記』の主人公李徴と、作者中島敦の共通性に関する問題に触れたい。

『山月記』の主人公李徴は、これまでの研究史上、たびたび中島敦との共通性が指摘されてきた。根拠となる一つの例を挙げると、弦巻(1977)は、『山月記』冒頭における李徴の「狷介」という設定について、「略翻訳に近い文脈であるにも拘らず『性疎逸』が『性、狷介』となっており、しかも『狷介』という語は原典(筆者註:『人虎伝』のこと)中に見出すことのできない語の使用なのである^(二六)」と述べ、その「狷介」という語が中島敦の詩「五月五日自晒戯作」中に、中島敦自身を指す言葉として用いられていることを指摘している。凡そ文芸の創作活動が、作者の故意によって行われる活動であるなら

ば、中島敦が自身について述べる際に使った「狷介」という語と、李徴の設定を述べる際に用いられる「狷介」という語の一致には中島敦の何らかの意図が認められてしかるべきであろう。その中島の意図が何であったのか、という点については別途考察が必要であるが、ここでは主人公と作者との間に、客観的に指摘し得る共通点が作品となって遺されている、という事実に着目したい。『山月記』をはじめとする「記」作品に、「俺」という、中島敦散文作品においては比較的使用頻度の低い一人称が使用され、それが自問自答場面で用いられる傾向があるということ、そして、主人公と作者との間に、客観的に指摘し得る共通点が作品となって遺されていることを合わせて考えた時、『山月記』には、構造上、主人公の語りの中に作者中島敦自身を思わせることを可能とする特徴が存在すると言えるのではない。事実、中島敦の夫人タカの「山月記」を読んで、まるで中島の声が聞える様で、悲しく思ひました^(二七)」というコメントや、中島敦に『山月記』原稿を託された深田久彌の「虎に化した李徴の慟哭の中に、作者の痛切な歎きを聞かないだろうか^(二八)」というコメントに代表されるように、これまでに、主人公李徴に中島敦自身を感じ取った評や論文は数多い。『山月記』には、構造的に今挙げたような評や考察を可能とする特徴が存在していたのではなからうか。前節までの論から見ると派生的な問題ではあるが、重要な問題であるので言及した上で論を終えたい。

終章

第一節 結論

以上のことから、中島敦の「記」作品について、次のような特徴が指摘できる。

まず、一人称「俺」の出現頻度が他の作品と比べて明らかに高い。そして、「俺」という一人称は、それぞれの作品において主人公の自問自答場面で用いられる傾向がある。よって、中島敦の「記」作品は、主人公自身による自身の内面の記述としての性格が、他作品と比して相対的に強い。

『山月記』においてもこのような性格が認められることから、中島敦が原話のタイトル『人虎伝』を『山月「記」』へと改めたことには必然性があったと言える。

また、先述のような「記」作品の性格は、『山月記』のように、主人公と中島敦との間に何らかの共通性が指摘されれば、作者と共通性を有する作中の主人公が語る自問自答が、そのままた作者の声として読み取られ得るという構造を生む因子となっていると指摘できる。ただし、こうした読みが本当に中島敦の作品の読解、中島敦の意図、あるいは中島敦の創作活動について明らかにすることにつながるかどうかは別途考察が必要であろう。

第二節 今後の課題

中島敦の散文作品における「俺」という一人称の用例の出現頻度の偏りによって、中島敦の「記」作品の特徴の一端を考察する手がかりを得た。ただし、今回指摘した特徴は、本章第一節で除外した『環礁』においては指摘できない。『環礁』と「記」作品との性格の共通性・相違性については別途検討が要する。ま

た、「俺」の用法の特徴については拙論のみによって網羅的に調査を尽くせたとはいえ難く、更に詳細な検討が必要になるだろう。加えて、「記」作品の特徴を作品論的に捉えうる他の指標が存在しないかどうか、検討を重ねる必要がある。

【付記】

本論文は、立命館守山高等学校二〇一七年度国語科の授業において、当時二年生の生徒九名（赤田・今井・宇高・川崎・篠原・田井中・高田・村地・山岡）がチームを組み、表題に掲げた問題について先行研究や各種文献について調査し、執筆した論文に基づくものである。生徒たちが調査した内容や考察に基づき、教員二名（林・岸）が追加の調査と情報整理をした上で、論文の修正を行った。

【注】

- (一) 濱川勝彦 (1971) 「山月記」論——「律背反と逆説の世界」——『国語国文』40-8、p.25。
- (二) 金澤庄三郎編 (1911) 『辞林』(三省堂)、p.1091。
- (三) 同上書、p.328。
- (四) 秋元誠 (1989) 「中島敦「山月記」小考——「伝」から「記」へ——」『富山工業高等専門学校紀要』23、p.84。
- (五) 勝又浩 (2004) 『中島敦の遍歴』(筑摩書房)、pp.129-130。
- (六) 堀誠 (2010) 「月への咆哮——中島敦「山月記」考——」『早稲田大学国語教育研究』30、pp.123-124。
- (七) 同上論文、p.122。
- (八) 『悟浄出世』『悟浄歎異』の二作品を指す。

(九) 拙稿においては便宜上、「己(おれ)」「わし」の例も含んで「俺」と表記する。「わし」を「俺」と同類と見なすのは、『断片』において、「俺(わし)」は、まだそんな年寄では、ないでな。」(ちくま文庫(1993)『中島敦全集 3』p.397)という例が認められ、「俺」との近似性が指摘できるからである。

- (十) ちくま文庫(1993)『中島敦全集 1』p.138°
- (十一) 同上書、p.23°
- (十二) 同上書、p.22°
- (十三) 同上書、pp.207-208°
- (十四) 同上書、p.34°
- (十五) 同上。
- (十六) 同上書、p.31°
- (十七) ちくま文庫(1993)『中島敦全集 2』p.117°
- (十八) 同上書、p.118°
- (十九) 同上書、pp.115-116°
- (二十) 同上書、pp.165-166°
- (二十一) 同上書、pp.209-210°
- (二十二) 同上書、p.214°
- (二十三) 同上書、p.240°
- (二十四) 同上。
- (二十五) 同上。

- (二十六) 同上書、pp.249-250°
- (二十七) 同上書、p.264°
- (二十八) 弦巻克二「中島敦「山月記」私論——故郷喪失からの出発——」『光華紀要』15、p.86°
- (二十九) 中島タカ「おれにかへて」(文治堂書店(1959)『中島敦全集 4』附月報『ツシタラ 第四輯』p.22)°
- (三十) 深田久彌「中島敦君の作品」(文治堂書店(1959)『中島敦全集 2』附月報『ツシタラ 第二輯』p.3)°

- (はやし) じゅんじ・英数学館高等学校教諭
- (きし) かずひろ・立命館守山高高等学校講師
- (あかだ) あゆ・立命館守山高高等学校三年生
- (いまい) なつみ・立命館守山高高等学校三年生
- (うだか) そうしろう・立命館守山高高等学校三年生
- (かわさき) せな・立命館守山高高等学校三年生
- (しのはら) りょうた・立命館守山高高等学校三年生
- (たいなか) かずき・立命館守山高高等学校三年生
- (たかだ) まりな・立命館守山高高等学校三年生
- (むらち) しん・立命館守山高高等学校三年生
- (やまおか) しゅんすけ・立命館守山高高等学校三年生

【表1】中島敦散文学作品における「俺」例数と出現頻度

	作品名	例数	所要頁数	出現頻度
1	悟浄歎異（わが西遊記）	4 3	2 1	2 . 0 4 8
2	悟浄出世（わが西遊記）	3 0	3 4	0 . 8 8 2
3	狼疾記	3 1	3 8	0 . 8 1 6
4	ある生活	8	1 1	0 . 7 2 7
5	山月記	7	1 1	0 . 6 3 6
6	かめれおん日記	1 4	3 5	0 . 4 0 0
7	巡査の居る風景	7	1 9	0 . 3 6 8
8	光と風と夢	4 9	1 3 9	0 . 3 5 3
9	牛人	2	8	0 . 2 5 0
10	盈虚	3	1 4	0 . 2 1 4
11	文字禍	2	1 1	0 . 1 8 2
12	弟子	8	4 6	0 . 1 7 4
13	夫婦	2	1 2	0 . 1 6 7
14	木乃伊	1	8	0 . 1 2 5
15	喧嘩	1	9	0 . 1 1 1
16	北方行	1 4	1 3 9	0 . 1 0 1
17	幸福	1	1 0	0 . 1 0 0
18	D市七月情景（一）	3	3 1	0 . 0 9 7
19	虎狩	3	3 8	0 . 0 7 9
20	斗南先生	1	3 7	0 . 0 2 7
21	狐憑	0	8	0 . 0 0 0
22	下田の女	0	1 4	0 . 0 0 0
23	蕨・竹・老人	0	2 0	0 . 0 0 0
24	雞	0	1 4	0 . 0 0 0
25	寂しい鳥	0	6	0 . 0 0 0
26	夾竹桃の家	0	7	0 . 0 0 0
27	ナポレオン	0	1 3	0 . 0 0 0
28	真昼	0	6	0 . 0 0 0
29	マリヤン	0	1 1	0 . 0 0 0
30	風物抄	0	2 2	0 . 0 0 0
31	李陵	0	5 7	0 . 0 0 0
32	名人伝	0	1 1	0 . 0 0 0
33	章魚木の下で	0	4	0 . 0 0 0
34	プウルの傍で	0	2 7	0 . 0 0 0
35	無題	0	2 5	0 . 0 0 0
36	セトナ皇子	0	4	0 . 0 0 0
37	妖氛録	0	9	0 . 0 0 0